

『論理学研究』と意味の神話

葛谷 潤

本稿の目的は、『論理学研究』（以下『論研』）においてフッサールが自らの意味概念およびそれに関連する諸概念について述べている諸論点の持つ意義を、主に意味の神話という観点から考察することで、明確化することである。

『論研』における意味の神話」という言葉がまずもって連想させるのは、『論研』において意味に理念的存在者であるという形而上学的地位が与えられている、という問題だろう。彼によれば、我々が表現を理解する際に把握する意味とは、心理学的な事実、例えば主観的な心的像や実在的対象との間の一定の因果的メカニズムなどには還元され得ない。むしろ意味とは、個々の主観的な心的作用の内部にではなく、しかも時空間的に特徴付けられるような現実世界の成員でもなく、いわば第三の領域、時空間的な特徴付けが意味を持たない理念的なものの領域に住まうものである。『論研』における意味概念の理念性は、フッサールの心理学主義からの決別を意味するものではあったが、同時に、彼がある種のプラトニズムへコミットしているのではないかという疑念を抱かせるものでもあった。

『論研』に対するこのようなタイプの疑念はとりわけ目新しいものではないし、後に見るように、それに対するフッサールの応答もそれほど複雑ではない。しかし本稿で扱う意味の神話とは、このような理念的存在者の形而上学一般に関するものとは、全く無関係でないにせよ、ひとまず区別されるべきものである。本稿が扱うのは、論文「フレーゲの第三領域の神話」（以下「神話」）において、ダメットが明確にフレーゲに帰属し、またフッサールもまたコミットしているのではないかと訝しんでいるところの神話である。この神話は、意味とそれに関連する諸概念の間の概念的連関に関わるものであり、またそれに陥ると言うことが意味を神秘的で説明不可能なものにすることであるような、そういった神話である。

この神話にフッサールが陥っていないことを確認することの意義として、次の二つが指摘できる。一つは、ダメットにより間接的ではあれフッサールに投げかけられたままの問題を解消するということである。問題の神話が意味概念の理解可能性に関わり、また『論研』の志向性理論が作用の志向性を意味概念の解明によって明らかにしようとするプロジェクトである以上、これは彼の『論研』のプロジェクト全体の遂行可能性に関わる問題となる。もう一つは、この神話を

いかにフッサールが回避しているかということを検討することで、『論研』における意味およびそれに関連する諸概念に対する彼の分析の眼目が明確になるということである。

ここで予め、本稿の「神話」論文の取り扱いは一面的なものであることを断っておきたい。「神話」論文の目的は、フレーゲが一方において意味の神話に陥るような考え方をしていたのに対して、他方で彼の意味論の基本的な構図、すなわち指示の理論に基づく意味の理論という構図は、そのような神話を回避しようのものであった、というフレーゲ哲学の緊張関係にある二つの面、否定的な面と肯定的な面の両者を指摘することである¹。しかし、その肯定的な面とフッサールの志向性理論の関係に関しては、すでに他の箇所ですくなく論じた²。したがって本稿では、否定的な面の指摘のみを取り上げ論じることとする。

以下、本稿の議論の構成を述べる。第1章では、本稿で問題にする意味の神話が理念的存在者の形而上学についてのものではないということを確認する。第2章で、ダメットの議論から意味の説明に対する制約を二段構えのものとして取り出し、それらをフッサールが満たしているかどうか、また満たしているとすればそれはいかにしてかを検討する。

1. 理念的存在者の神話とフッサールの応答

まず、本稿で主に取り扱う意味の神話が、単に理念的存在者としての意味の導入に関するものではないという点から確認しよう。フッサールは、生成消滅が問題にならない、理念的な存在者として意味を導入することを、次のような仕方で正当化している。フッサールはまず、作用の対象が存在するという事実を、その対象についての判断が真であるということから理解する³。さて、我々は意味に関して、例えば「20以上30未満の完全数」という語の意味」という表現を用いてそれを名指すことができる。さらに、例えば「20以上30未満の完全数」という語の意味は「葛谷潤」という語の意味とは異なる」などの仕方で、それに対して様々に述定することで、それについての判断を形成することができる。しかも、それらの判断のいくつか、例えばまさに今あげた判断は真なものである。そして最後に、意味には時間的な述語が当てはまらないので、それらは超時間的な、そしてその意味で理念的なものである。

さて、「神話」においてダメットは、批判対象であるフレーゲに、名指されえまた一定の述定がされうるならば対象として存在するという、前段落で確認したフ

フッサールの主張とほぼ同様の主張を帰し、その限りで意味を対象であると述べることには問題がないと述べている⁴。また、意味が永遠不変であるという性格を持つとされることも、当の論文で問題とされる神話とは直接関係がないと考えている⁵。以上から分かるように、「神話」におけるダメットの批判は、フッサールのような仕方で意味を理念的存在者として導入することに対する批判ではない⁶。

では、どのような批判なのか。意味の神話に関するダメットの議論は、意味の説明が十全なものであるためには必ず満たすべき制約の提示として理解することができる。次章では、彼の議論から意味の説明に対する二つの制約を段階的なものとして取り出し、それをフッサールが満たしているかどうかを検討する。

2. 意味の神秘化とフッサールの応答

2. 1 第一の制約

第一の制約は、意味を心的作用ないし言語行為から完全に独立した、自存的な対象として扱ってはならない、という制約である。まず注意すべきなのは、ここで問題になっている依存関係は、意味や命題の存在が、一定の心的作用の存在を要求するというような、実在に関する依存関係ではないということである。「誰もこれまで組み立てたことのない文が存在し、そしてそれらの文は発話された文と全く同様に意味を持つ。これらのことは、思想はそれを我々が把握するとか表現するということに依存していない、とフレーゲとともに述べる正当な根拠である」(Dummett 1993, 249)。むしろここで問題になっているのは一方に言及することなしには他方が理解できないという、本質的・概念的な依存関係である。

この点に関してダメットは、「神話」の冒頭において、チェスの例を用いて読者を説得しようと試みている。しかし、彼自身の論述は、少なくとも形の上では、英語における「move」という表現の持つ多義性（「チェスの一手」とも「駒の動き」とも訳せる）に依存して進み、またその論点も「神話」で最終的に扱われるポイントと完全には一致しないものであるように思われる。したがって以下では、彼の議論の最終的なポイントを踏まえた上で、私なりに彼の議論を再構成する形で論じることとする。これにより、彼が意味の説明に対してどのような制約を課しているかだけでなく、彼が大体においてどのような方針での説明を示唆しているのかも読み取ることができるだろう。

まず一般に、ある実践において、ある出来事がある実践の中でどのような役割ないし意味合い (significance) を持つものであるかということは、それがその実

実践で目指されているものという観点から、その実践において引き続いておこることに対してどのような違いをもたらすかという潜在性 (potentiality) として記述することができる⁷。例えばルーレットで考えてみよう。ルーレットというギャンブルゲームにおいて、一定のチップを一定の場所に所定の時間内に置くということが持つ意味合いは、玉が一定の場所に入れば配当を得るがそうでなければチップを失うという可能性に開かれ、玉の行方に関わらずチップを保持する可能性はなくなった、等々を記述することではかることができる。これを決定するのは、ルーレットのルールである。ここである人が、十分にルーレットのルールを理解していると言えるでしょう。このとき我々は、一定のチップを一定の場所に所定の時間内に置くという振る舞いがそのゲームの中で持つ意味合いというものを、彼女は完全に知っている（ないしそれにアクセスすることができる）状況にいますといってよいだろう。ここまで、何ら神秘的なものは見当たらない。

さて、ダメットのポイントは、ここで次のように述べることは馬鹿げているだろうということである。「しかし、当の振る舞いが持つ意味合いとは、それがルーレットというゲームにおける振る舞いの意味合いであるということから独立した自存的対象である。したがって、ルーレットのルールを知ることによっては問題の意味合いそれ自体が完全に知られたことにはならない。当の意味合いが当の振る舞いの意味合いであることはその意味合いそれ自身にとって偶然的であり、また当の振る舞いがそのような意味合いを持つのは、どういうわけかそういった独立自存の対象とその振る舞いが何らかの関係を持ったからである」。このように考えるならば、すべてが神秘的になってしまう。意味合いという独立自存の対象とはなんなのだろうか。我々がそれについて知るとはどういうことなのだろうか。それが当の振る舞いの意味合いになっているということはどういうことなのだろうか。このように考えることは無用のこと、まさに思弁的な神話を生み出しているだけに思われるだろう。しかし、ダメットによれば、これこそがフレーゲが意味に関して行ったことなのである。（以下では議論の単純化のため、意味として、文によって表現されるような意味、つまり命題（フレーゲの言い方では「思想」）のみを考慮することとする。）

フレーゲが「思想」と呼んだもの——文の発話によって表現され、真ないし偽だと判断され、信じられ、知られ、疑われるところのもの——を言語および思考する存在者から独立だと見做してしまう、ということは完全にあり得る。これがまさにフレーゲがやってしまったことである。そしてまさにそう

してしまったということにおいて、彼が哲学的神話の罪を負うことになったのである。(Dummett 1993, 249-50)

以上から、彼が命題に関して神話と呼んでいるものがなんであるかだけでなく、同時に、彼が命題に関してどのような立場を打ち出したいかということも分かる。彼は命題を、我々の言語および思考する存在者が行う一定の実践において、我々が遂行する心的作用ないし言語行為の持つその実践への意味合いとして扱うことを示唆しているのである。そして、もしそのように命題を取り扱ったならば、ある作用が関わっている命題がなんであるかを明らかにするという点に関して、神秘的なものは何もない。問題の実践を支配する規範的な制約が何かを明示化すれば、それで全てが明らかになるわけである。逆に、命題を我々の言語および思考の実践に何らかの仕方で独立に理解しようとするようなものであると見做すならば、我々はそれらを神秘化することになる。ダメットはこう言いたいわけである。

2. 2 第一の制約へのフッサールの応答

この第一の制約を、『論研』のフッサールは満たすことができているのだろうか。まずここで注目したいのは、フッサールが命題を作用の対象ではなく、そのスペチエスとして特徴付けているという点である。フレーゲは、指示関係の第一の担い手は、表現やそれに関わる心的作用ではなく、命題であると考えた⁸。さらに彼は、我々が世界内の対象についての心的作用、例えば判断を遂行する際にも、命題をその心的作用の対象として理解する傾向にあった。フレーゲが第一の制約を満たせなかったのはこのような考え方にある、とダメットは考える。このような考え方は、命題という存在者が、我々の思考や我々が用いる表現と概念的に全く独立に世界との一定の対応関係にまずもって立っており、我々は命題を対象とする作用を遂行しこの対応関係に偶然的に関わることで世界へと関わるという描像と連動する。そしてこのように考えると、確かに命題に対してある種の客観性、つまり主観からの独立性を容易に保証することができるが、同時に命題は我々の心的作用と本質的な関係に立つことができないものとなる。

これに対して、フッサールにとって志向性の第一の担い手はあくまで作用である。そして彼はまた、ある作用の志向性を命題によって説明する際に、命題を対象とするような何らかの作用の生起を持ち出さない⁹。むしろ『論研』のフッサールによれば、意味とは個々の作用の志向性という点における質的同一性を説明する観点として、彼の言い方では作用のスペチエスとして、理解されるべきもので

ある¹⁰。個々の心的作用は、それ自身は時間的性格を持ち生成消滅が問題になるような存在者である。したがって、個々の心的作用、例えば個々の判断作用は、それぞれ数的に異なるものである。しかし、我々は同じ作用を、例えば「葛谷潤が生まれたのは1985年4月9日だ」という同じ判断を、繰り返し遂行することができる。またこれは、「安田講堂は茶色い」という判断と異なる志向性を持つ。つまり、諸作用はその志向性という観点からして質的に同一であったり異なるものであったりするのである。彼によれば、このような質的同一性を説明する観点となるのがスペチエスとしての意味である。確かにフッサールにおいても、作用は必ず命題との関わりのもとでその対象へと向けられる。しかしその際、第一義的な志向性の担い手、世界と関わっているところのものは命題ではなく作用であるし、また当の命題はあくまで作用の志向的特性の種類であって、作用がその対象へと関わる仕方のタイプであるということが、命題の本質に属している。

加えてフッサールは、命題と心的作用との関わりを本質的だと見做していただけでなく、一定の心的作用の分析によって十全に解明されるようなものとも見なしていた。このことは、フッサールの『論研』第2巻の序論における、現象学の目的に関する記述を参照することで確認できる。彼によれば、命題という概念を含む、論理学の基本概念に固定された意味を与えること、言い換えれば命題等の基本概念がいったいいかなるものなのかを解明することである¹¹。重要なのは、それらの意味とは「意味志向と意味充実化の間の、分析的に探求可能な結びつきに立ち返ることで解明され、しかも認識におけるそれらの作用の可能な機能において理解可能でありまた保証されるような意味である」(XIX/1, 10-11)と見なされているということである。命題に関してこれを言い直せば、『論研』において命題とはなんであるかということは、彼が「意味志向」と呼んだ作用と「意味充実化」と呼んだ作用が認識において果たす役割の分析を通じて理解されまた保証されると述べているのである。ここで意味志向および意味充実化と呼ばれている心的作用がどのようなものであるかは、次章で論じることとする。この点を措いておいても既に、命題概念とは一定の心的作用と本質的な連関を持つだけでなく、さらに一定の心的作用が認識において果たす役割を参照することで分析されるものだとフッサールが考えていることが分かる。したがって、『論研』のフッサールが第一の制約を満たしているということが示された。

ここで、次のような反論がフッサールに対してなされるかもしれない。フッサールは意味を本質的に心的作用に結びつけはしたが、言語表現には結びつけなかった。したがって、フッサールは結局表現が意味を持つとはいかなることかに関

しては、それを神秘的なものにした、というものである。これに関しては、次の二つの点を指摘しておくこととしたい。第一に、これはダメットも指摘していることだが、そもそも『論研』におけるフッサールが、一定の言語表現に結びつくということが意味にとって偶然的であると考えていたということは、それほど自明なことではない¹²。第二に、ダメットの議論から言語表現無しの命題的思考という考えがあり得ないということが帰結するわけではない。確かにダメットはそのような場合でもいわば何らかの媒体 (medium/vehicle) となるものが思想には必要だと述べる。しかし、思想の媒体たるものに要求される資格とは何かは明らかではなく、それゆえ心的作用ないしその構成要素がその候補として不適格であるということも明らかではない。また、言語無しの思考から言語的意味を説明することが不可能であるということも、明らかではない。これらはいわゆるエヴァンズ、ピーコックらに代表される「思想の哲学 (philosophy of thought)」の可能性にも関わる問題であり、容易には答えが出る問いではないだろう。したがって本稿では、この問題は未決問題として措いておくこととする。

2. 3 第二の制約

第二の制約は、意味が本質的に結びつけられ、またそこから意味が解明されるころの作用は判断であり、命題の把握という概念は判断という概念を前提するというを適切に洞察している必要があるというものである。

まず命題に関して重要な特徴として押さえるべきなのは、それが様々な心的作用ないし言語行為において共通の内容として現れるということだ。例えばある人が「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観測されるだろう」と発話したのを私が聞き、その内容を把握はしたのだがそのことの真偽に関して疑問に思ったでしょう。私は自分が疑問に思ったそのことをその当人に質問する。その後、私は彼女に連れられそのことを実際に見て確かめ、同意し、さらにはそのことを主張という形で他者に伝達したとする。この場合、私が発話から読み取り把握し、その真偽を疑問に思い、質問し、見て確かめ、同意し、主張した「そのこと」は同一のことを指している¹³。このことを体系的に理解しようとすれば、ここで「そのこと」で問題になっている内容をそれに対する我々の関わり方 (把握する、疑問に思う、同意する等々) から独立して変化しうるものとして取り出す必要がある。(これが、フッサールの作用質料から作用性質を区別し、フレーゲが意味 (Sinn) から力を区別したことのポイントである。) ここまでは、何の問題もない。

問題は、このことに基づいて、当の内容概念にとって本質的なのは、せいぜい

命題を把握するという関わり方であると考えた際に生じる。こう考えることはそれほど不自然ではない。我々は様々な仕方でも命題と関わりを持つ。すると、命題にとって本質的なことは、それらのうちで共通なものだけであると思われる。さて、問題となりうるどの関わり方であれ、同時に命題を把握していると言えるだろう。よって、命題を把握するという関わり方が本質的であると思われる。

しかしダメットによれば、むしろ判断こそが命題にとって本質的であり、またその把握に先行する。なぜなら、命題の把握は真偽の概念を前提し、真偽の概念は判断の概念を前提するからである。

まず、命題の把握が真偽の概念を前提することから確認しよう。例えば、誰かが「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観測されるだろう」という文を発話したとする。このとき、我々はさしあたり彼がこの文が表現している命題を把握していると見做すだろう。しかし彼がその後山頂に登り、今まさにチンダル現象が生じている状況を目の当たりにしてなお、自分が述べたことが真であるか偽であるか分かっていないのならば、我々は彼がその文の内容を把握しているという評価を取り下げるだろう。実際、彼は先ほどのことを誰かチンダル現象に詳しい人から聞いただけで、彼が把握していたのはせいぜい「今日はあの山の山頂から「チンダル現象」と呼ばれている現象が観測されるだろう」ということに過ぎないということは十分あり得る。ここから、ある発話が表現する命題を理解していると言えるのは、その命題が真であるのがどのような状況であり、偽であるのがどのような状況であるかを知っている時だけだということが分かる¹⁴。また逆に我々は、このようなことを知っている主体に対しては、当の命題を理解していると思ふだろう。これを一言でいえば、ある主体がある命題を把握しているとは、その主体がその真理条件を把握しているということだ、という周知のテーゼとなる。

問題は、真ないし偽という概念は、判断という概念に訴えることなしには意味をなさないということである。より正確には、真を偽から分かつものは、判断を行う実践において目指されているものであるということに尽きる、ということである。ダメットは論文「真理」において、このことを、ゲームの勝ち負けという概念に真偽をなぞらせることによって説明しようとする¹⁵。この議論のポイントは、ゲームの勝利という概念にとって、我々がプレイする中で目指しているものであるということが本質的である、ということである。例えば、オセロを知らない人にオセロのルールを教えるという場面で、彼女にそれを次のような仕方でも教えたと思ってみてほしい。彼女にまずオセロの進行規則と、可能な任意の終局図を黒が多い、白が多い、同数の三つに分類するやり方を教える。そして彼女に

黒番であることを伝え、黒が多い場合を目指すよう伝えたとする。この際、「勝利」という語を全く用いなかったとしても、彼女は、上手であれ下手であれ、ともかくオセロといわれるゲームを始めることができる位置におり、またその語によって我々が伝えるべきことを全て知っている。逆に、黒が多い場合を「カチ」、白が多い場合を「マケ」、同数の場合を「ヒキワケ」だと呼ぶことができたとしても、続いて彼女が「それで、このゲームでは何を目標せばよいのですか？」と問うたならば、彼女はまだオセロを始めることができる位置におらず、結局のところ彼女はまだオセロにおける勝利とは何かが分かっていない。つまり、ゲームのプレイヤーが目指すものだということが、勝利という概念の一部をなすのである¹⁶。

ダメットが言いたいのは、これとまさに同様に、真と偽という二つの観念を分かちつものは、一方が判断を行う実践において目指されるものだという事に尽きるということである¹⁷。命題を把握することが思考の可能性の条件を形成しているため、全般的に真理概念を理解していないような事例を作ることはできないが、ある個別的な判断の場面で考えれば、次のような具体例がそれにあたる。ある人が、任意の可能な状況を与えられた際に、それを「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観測されるだろう」という判断が真である状況と偽である状況の二つに分類することができるだけでは、彼はまだその内容の判断を遂行することができる位置にはいない。そのためには彼はさらに、とりわけ一方の状況において当の判断を遂行するということを目指し、他方の状況において当の判断を遂行するということを避けようとするべきだということ把握する必要がある。そしてこれがまさに、真偽という観念を構成しているのである。逆に言えば、たとえ一方の状況におかれたときに「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観測されるだろうということがシンド」といい、他方の状況において「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観測されるだろうということがギド」と発話したとしても、どちらの状況において「今日はあの山の山頂からチンダル現象が観察されるだろう」と判断すべきである、ないしそうすることを避けるべきであるのかを知らないならば、なお彼は当の命題が真ないし偽であるとはどういうことかを知っているとは言えないだろう。そして、既に確認したように、ある命題の把握は、真偽の概念を前提する。したがって、ある命題を把握しそれを通じて世界について考えるということは、その主体が判断の実践に参加しているということの本質的に前提するのである。

したがって、命題にとって本質的な心的作用として判断を、しかも真理を目指すものとして同定し、それを命題の把握に概念的に先行させること、このことを

し損ねたならば、ある作用が関わっているところの命題とは何かということは再び神秘的なものとなる。そしてダメットによれば、フレーゲがし損ねたことはまさにこのことである。念のため言っておけば、このことは思想を把握するときには必ず判断も遂行していると言っているのではない。そうではなく、判断という概念に訴えずには思想の把握ということが意味をなさないと言っているのである。「フレーゲが繰り返し主張したように、人はある思想を判断することなく把握することができる。しかし、人は判断とは何かを知らずにはいかなる思想をも把握することはできない。なぜならその場合には、人は何らの真理の観念も持ち得ないだろうから。したがって、我々が、主張されたのではなく単に表現されたものとして考察されたところの思想から出発するとき、判断は単に解明不可能だけでなく、神秘的なものとなる」(Dummett [1986] 1991, 258-9)。「フレーゲは確かにそれ [=真理が目指されるものであるということ] を後から、彼の主張の理論において、持ち込もうとした——しかし、遅すぎた」(Dummett [1959] 1978, 2-3)。

2. 4 第二の制約へのフッサールの応答

ではフッサールはこのようなルートから神話へと陥っているのだろうか。つまり、フッサールは命題にとって本質的な心的作用として判断を、しかも真理を目指すものとして同定し、それを命題の把握に先行させることに失敗しているのだろうか。そうではないことを示すには、次の二つのことを確かめればよい。すなわち、『論研』のフッサールが(1) 真理を判断の目標として理解し、(2) 判断が命題の把握に概念的に先行すると考えていること、この二つである。

まずは(1)から始めよう。この点を確認するために、まずはフッサールによる認識概念の特徴付けを確認したい。「対象の認識という言い方と、意味志向の充実化という言い方とは、単に観点を異にするだけで、実は同じ事柄を表現している」(XIX/1, 567)と述べられるように、フッサールは認識を意味志向の充実化として定義する。真理や認識に関わる文脈において最終的に意味志向に分類される作用は判断である¹⁸。さらに、第五研究においてフッサールは次のように述べる。

「志向」という表現は、狙うという比喩のもとで作用の特性を表象しており、したがってこの表現は、自然にまた平明に理論的ないし実践的な狙いとして表示されうる、多様な諸作用を表すのに非常に適している [...] 比喩的に言えば、目標を狙う (Abzielen) 働きには、相関者として目標を達成する (Erzielen) 働き (発射と命中) が対応している。それと全く同様に、「志向」

(例えば判断志向、欲求志向)としての諸作用には、「目標達成」ないしは「充実化」としての他の諸作用が対応しているのである。(XIX/1, 393. 強調は原文)

「意味志向」と呼ばれる作用は、ここで「志向」と呼ばれている作用の下位分類にあたる。そして、この引用から伺えるのは、「志向」と呼ばれる作用は目標を目指すという役割を持ち、意味志向の充実化とはその目標が達成されることだ、とフッサールが考えているということである。さて、この意味志向の充実化は明証とも呼ばれ、そこにおいて与えられるのは真理であるとされる¹⁹。したがって、意味志向が目指しているものは真理である。しかも、「Aは真である」という命題と、「Aが成り立っているという判断を明証とともに行うことが誰かにとって可能である」という命題には、あきらかに一般的な同値関係が成り立っている」(XVIII, 187)といわれるように、フッサールは真理を、明証を伴う判断、つまり充実化された意味志向の可能性として理解している。したがって、真理は本質的に意味志向すなわち判断によって目指されるものである。以上から、判断によって目指されるものであるということが真理の本質の一部をなしているとフッサールが考えていることが分かる。よって、(1)が示された。

ここで、次のような反論があるかもしれない。『論研』において、命題を把握する作用は単純表象と呼ばれる作用にあたる。さて、意味志向には判断だけでなく単純表象と彼が呼ぶ作用も含まれるのではなかっただろうか。もしそうだとすれば、このことが意味しているのは、先ほどダメットの議論によって確認された判断作用の重要性を、フッサールが捉え切れていないということではないか。

この疑念には以下のように応答することができる。確かにフッサールは、意味志向という概念をまずは第一研究において表現理解の体験にとって本質的な作用として導入する²⁰。そしてその後、意味志向という語を、基本的には命題を把握する作用を含む形で用いている。これらのことは全くその通りである。しかしこのことは必ずしも、『論研』においてフッサールが真理概念や認識が問題になる文脈において問題となる意味志向という概念の例として、命題を把握する作用が適切であると最終的に結論したということの意味しない。まず、認識と真理の関係に関して論じられる第六研究第5章において、彼は「志向ないし狙いという言い方は本来的には措定的作用にのみふさわしいもののように思われる」(XIX/2, 650)と述べる。ここで、措定的作用とはその作用が関わる場所の対象が現実にかかっているかに関するコミットメントを伴う作用であり、これは判断を含むが、

単純表象は含まない²¹。つまり、真理との関わりにおいて目標を狙うという作用の特性に注目して「志向」という語を用いるならば、それはとりわけ判断を指すものとして理解すべきであり、単純表象を含むものとして理解すべきではない、とフッサールは述べているのである。さらに、フッサールは単純表象が充実化されたように思われたとしても、それはあくまでそれに対応する措定的作用、つまり判断が充実化されたと考えるべきだとさえ論じる²²。すると結局、真理を目指す作用として意味志向が理解されている場合、それは最終的には判断だけに限られるとフッサールが考えていたことが分かる。

ここでなお、次のような反論があり得る。確かにフッサールは、真理や認識との関係においては判断に優位を認めていたかもしれない。しかし、全ての作用の志向性の基底となると彼が考えていたところの、彼が「客観化作用」と呼ぶ作用の内側において、彼は判断と単純表象を全く平行的に扱っているように思われる。例えば門脇は、まさに本稿が上で引用した「志向ないし狙いという言い方は本来的には措定的作用にのみふさわしいもののように思われる」(XIX/2, 650) という箇所を引きながらも、この記述は十分ではなく、『論研』ではなお措定的性格から切り離された意味のみが志向性に本質的だと考えられていた、と述べる²³。ここで問題になっているのは(2)の論点、命題の把握が判断を概念的に前提するとフッサールが考えていたのかどうかという点である。

おそらくここで門脇によって見落とされているのは、フッサールが、単純表象を判断作用の「変様(Modifikation)」と位置づけているという点である(XIX/1, 499)。第2版においてフッサール自身が改めて注意を促していることだが、ある作用がある作用の変様であることで彼が意味しているのは、後者の作用が生じる際に前者がまず生じ、それが後者へと変化するという過程が実際に生じるということではない²⁴。つまりこの場合であれば、表現を理解する作用が生じるために、まず判断作用が生じ、ついでその判断作用から何らかの仕方で表象作用が生じるという心理的過程が実際に生じなければならないということではない。実際、一定の判断が生じることなく思想を把握することは可能であるし、このことはフレーゲと同様にフッサールもまた認めることでもある²⁵。むしろ、単純表象が「非措定的な、つまり措定という点で変様された作用」(XIX/1, 501)と特徴づけられることから分かるように、フッサールが「変様」という言葉で意味しているのは、表象作用は、あくまで判断作用のコミットメントを保留したものとして理解されるべきだ、という概念的な依存関係である。そしてこれはまさに、(2)の論点そのものである。

3. 結論

以上で我々は、『論研』のフッサールが、少なくとも本稿が取り出した「神話」における制約を満たしており、それゆえフレーゲのような仕方では意味の神話に陥ってはいないということを確認した。それと同時に、作用のスペチエスとして意味を理解すること、意味を一定の作用の認識における役割を解明することによって明らかにしうるものだと見做すこと、目標を目指す作用として判断を理解すること、真理を明証的な判断の可能性において理解すること、単純表象を判断の変様と位置づけること、このようなフッサールのテーゼがどのような意義を持っているかが、はっきりしたことと思う。

大まかには同様の枠組みを同様の概念を用いて記述していると言われうるフレーゲとフッサールであるが、その概念連関は詳しく見れば、とりわけ意味の神話という観点から見れば、かなりその様相を異にする。そして、作用のスペチエスとして意味を理解し、それを一定の作用の認識における役割を解明することによって明らかにしようとするのがまさに『論研』第2巻の目標であること、また上のような概念連関がその第2巻において記述されたことを考えると、本稿で示されたことは、フレーゲがなし得ず、またなそうともしなかったが、しかし意味の説明に必要であるところの意味の脱神秘化に、『論研』のフッサールが単に取り組んだというだけでなく、かなり見込みのある位置に達していた、ということだと言ってもよいだろう。

¹ 本稿では、フレーゲの「Sinn」、フッサールの「Sinn」及び「Bedeutung」を「意味」と訳し、フレーゲの「Bedeutung」を「指示」と訳す。

² 葛谷 (2013b) において、指示の理論に相当するものとして『論研』のフッサールの充実化の理論が指摘され、葛谷 (2013a) において、フッサールの充実化の理論が指示の理論の代わりとして機能しうることが論じられている。

³ XIX/1, 106, 129-130 を参照。さらに富山 (2009a, 68-70) も参照。

⁴ Dummett ([1986] 1991, 241, 261) を参照。

⁵ Dummett ([1986] 1991, 250-1) を参照。

⁶ Dummett ([1986] 1991, 250-1) を参照。

⁷ Dummett ([1986] 1991, 261) を参照。

⁸ Dummett ([1986] 1991, 252-5) を参照。

⁹ XIX/1, 108-109 を参照。

¹⁰ このことは、フッサールがスペチエスは個別者の質的同一性の観点だと述べていることと、意味と作用の関係がスペチエスとそれを例化する個別者との関係と同じだと述べていることから帰結する。前者に関しては XIX/1, 117-8、後者に関しては XIX/1, 105-6 を参照。この点に関する詳しい議論としては、富山 (2009b) を参照。

¹¹ XIX/1, 11 を参照。

¹² フッサールが「実際に意味として働くところの理念的な諸統一体と、それら諸統一体が結び

つけられているところの、つまりそれによって人間の心的生においてそれら諸統一体が現実化するところの記号の間には、それ自体としては本質的な連関は何もない」(XIX/1, 109-10)と述べていることは決定的ではない。XIX/2, 622における同様の主張に関しても事情は変わらない。なぜならこれらは、意味と特定の形象を持った記号との結びつきに関する主張として理解できるからである。Dummett ([1986] 1991, 251)も参照。また、実際にフッサールがそのような主張をしている箇所としては、XIX/2, 619-20を参照。

¹³ これに関しては、XIX/1, 109におけるフッサールの議論を参考にした。

¹⁴ 正確には、同じ命題が異なる表現で表現される可能性があるので、「その命題を表現する他の表現においても同様である」という但し書きが必要である。

¹⁵ Dummett ([1959] 1978, 2-3)を参照。

¹⁶ もちろん接待ゴルフの場合のように、プレイヤーが負けることを目指してゲームをプレイすることはあり得る。しかしこのように彼の振る舞いを記述する際に前提されているのは、まさに彼が「ゴルフのプレイヤーとしては避けるべきもの」をそれとして目指しているということである。彼がこのことを理解していないなら、彼は接待ゴルフとは何かを理解しているとは言えないし、またそもそもゴルフとは何かも理解していないだろう。

¹⁷ 「判断に訴えることなしには、二つの真理値を互いに区別する方法はないということは明らかである」(Dummett [1986] 1991, 258)。

¹⁸ 現在、考慮されている意味は文の意味、すなわち命題に限られていることに注意。

¹⁹ XIX/2, 651を参照。

²⁰ XIX/1, 44を参照。

²¹ XIX/1, 501を参照。

²² XIX/2, 650を参照。

²³ 門脇(2002, 45)を参照。また、フッサールが作用質料のみが志向性にとって本質的だと述べているという門脇の指摘は、本稿の議論への決定的な批判にはならない。なぜなら本稿で問題になっているのは初めから、性質から切り離された質料それ自身の理解可能性だからである。

²⁴ XIX/1, 488(第二版)を参照。この箇所の直前で問題となっているのは作用の質料に関する変様概念であり、本稿が扱っている作用の性質に関する変様ではないが、この箇所の主張は「変様」という語の一般的な注意として理解することができる内容だと考えられる。

²⁵ XIX/1, 464におけるフッサールの同意概念に関する考察を参照。

[参考文献]

フッサール全集(Husserl, Edmund. *Husserliana: Gesammelte Werke*, Martinus Nijhoff)からの引用は、ローマ数字で巻数を示す。

Dummett, Michael. (1959) 1978. 'Truth,' in Dummett (1978), 1-24.

———. 1978. *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press.

———. (1986) 1991. 'Frege's Myth of the Third Realm,' in Dummett (1991), 249-62.

———. 1991. *Frege and Other Philosophers*, Oxford, Clarendon Press.

門脇俊介. 2002. 『理由の空間の現象学』, 創文社.

葛谷潤. 2013a. 『論理学研究』の志向性理論における「意味」と「充実化」, 『フッサール研究』, 第10号, フッサール研究会, 61-75.

葛谷潤. 2013b. 『論理学研究』における意味の独立性・非独立性について, 『現象学年報』, 第29号, 日本現象学会.

富山豊. 2009a. 「フッサール初期志向性理論における「志向的对象」の位置」, 『フッサール研究』, 第7号, フッサール研究会, 61-72.

富山豊. 2009b. 「フッサール『論理学研究』における意味のイデア性について」, 『論集』, 第28号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 132-45.